

長沢伸穂の光る伝馬船

てんまぶね

一

グラスファイバーの糸で織られた光る舟。

長沢伸穂の伝馬船は暗い空間で、青い影を下界に落として、そしてらぬ顔で揺れている。ワタシハココニイルダケ。

わたしはここにいるだけ

わたしが光っているのはわたしが蛍のように命いのちだから

触りたい抱きたい抱かれない、そう感じてしまったら、

わたしの中に落ちてきて

わたしは命、わたしの光に落ちて来て

恋に落ちるように落ちてきて

恋は俗世間のものなので、老若男女、国籍を問わず誰もが長沢伸穂の光る伝馬船に乗れる。

問われる感受性は恋に脆いか。つまり美に脆いかである。

気がつく和小舟に向かって歩いていく。

伝馬船はガラパゴス時代の島国日本が生んだ〈木造はしけ〉の一種だが、長沢伸穂の小舟はここで世界性を獲得する。

こうして小舟に乗る。潮騒の音が聞こえる。

乗って仰向けになると少し背中が痛い。痛さは順番を待つ人たちには僥倖で、これがなければ眠ってしまう。

六〇億人いても同じ人はいない。

〈死と再生の舟〉と考えて、短い漂流に身を任せる人がいる。目をつむる。目を開ける。おき上がり降りれば既成の考え方の一部が壊れて、なにかが生まれている。あるいはいつかインスピレーションをもたらす記憶になる。

〈電飾伝馬船〉として記念のVサイン写真を撮る人がいたとしても、小舟を降りる時は小さな幸せといっしょにいる自分を発見する。長沢伸穂の小舟は人を問わない大衆性も獲得した。

この小舟に向かって魚雷を発射する國や政治グループはあるだろうか。彼女の作品を鑑賞、体験する人たちは、この種の不安についても考えることになろう。

広く深い平穩。心奥に落ちていくこんな静かな体験、人生に何回あると思う？わたしの心って、海や空のように広がって……。

作品の持つ思索性とその人間内面への浸透。

二

長沢伸穂の小舟は、今は日本という大小の島からなる国の小豆島肥土山地区ひつちやまの元穀物倉庫に展示されている。

交通手段はバスかレンタカー。橋を越えてすぐ十字路があり、左に曲がって五、六〇歩歩くと右側にある。

ぼくの心は年齢にふさわしく、十字路のところできわめき始める。十字路の角に大きな忠魂慰霊碑があった。岩から削りだされた碑には、この町から出征して戦死した人たちの名前が刻まれている。日清、日露戦争の死者は少数、太平洋戦争の死者は数えたくないほど多い。職業の表示はないが、多くは農民。

歴史の涙を秘さない岩石はない。

穀物倉庫はどの時代に作られたものだろうか。空調設備で温度管理されている現代の倉庫とは違う。土と麦わらの壁。壁面は白く仕上げられているが、湿気と埃と汗で灰色になっている。床は土間。天井に蛍光灯の痕跡があるので、蛍光灯が普及する時代までは現役だった。

あとはひたすら想像する。

往時、米麦雑穀を入れた俵が山積みされていた。強制的な供出制度があった。

当時は地主がいた。地主がいれば小作も日雇いもいる。貧農も中農も富農もいる。

個別の事情を抱えながら、戦争で若い労働力を失った老父、老母は盆も正月もなく働いた。小さな子供も。

土地があれば土地神を祀る神社があり、秋にはその年の初穂が捧げられる。

神官たちは国家の大事、故郷の大事に従軍、戦死した死者の魂を慰撫した。

神官を務めた人の家は近くにある。地主ほどの規模はないが、奥座敷もあれば石灯籠、石橋、蹲踞の庭もある。

長沢伸穂はその家に寝泊まりして展示の準備をした。

元穀物倉庫の引き戸を開ける。重い遮光カーテンがある。カーテンをかきわけて入ると光る舟がある。

あちこちから、床から、壁から、天井から、ささやく声が聞こえてくる。都会から来た人には聞こえない。

NOBUHOでなく伸穂！穂が伸びる。彼女の名前も意味を持ち始める。長沢伸穂の伝馬船は暗い空間でただ揺れてはいけけない。

小舟は誘う。どうかどうか、わたしの舟に乗って。わたしに昔の話聞かせて。わたしは^{なま}勞いの唄を歌います。

慰霊碑が小舟を見たくなくなって見たくなくなって歩きます。

三

長沢伸穂の伝馬船はどこかの砂漠、どこかの乾燥地帯に展示されれば、砂漠の空を漂うことになるう。

アラビアのロレンス、あんたはなにをしたかったのだ。

巨大な高層ビルが林立する大都会に展示されれば、重過ぎて飛べないロケットのようなビルとビルの隙間を、川舟になって櫓をきしませることになる。

もうそろそろ、二十一世紀とはいかなる世紀であるべきか、正面を見つめる誠実で情熱的な観察者として、答えを見つける旅に出るべきではないでしょうか。

ぼくは長沢伸穂をノンちゃんと呼んで愛称で呼んでいる。ノンちゃん、ここで日本の童謡を歌わせて。

村の渡しの船頭さんは今年六十のおじいさん

歳はとつてもお舟をこぐ時は

元気いっぱい櫓がしなう

それ　ぎっちら　ぎっちら　ぎっちら

この歌詞のどこにもセンチメント(感傷)はない。あなたと同じように、進むだけです。

疲労困憊したら空を見上げましょう。NOBUHOで伸穂でノンちゃんの小舟を見ることができます。